生活通信

NO.９４　平成３０年１１月号　岡崎市現職研修生活科広報部発行

「つながりと主体性」

生活科部長　梅　田　康　典

今、形埜小学校の体育館では屋根と外壁の塗り替えが急ピッチで進んでいます。先日、塗料を屋根に上げるために、大型クレーン車がやってきました。その作業の手際のよさに、しばし見とれていました。その時に、二十数年前のことを思い出しました。

夏休みに家族で関東地方の有名なテーマパークを訪れました。前の日に、新宿のホテルで一泊し、次の日の朝、部屋を出ようとしたとき、窓の外でショベルカーが作業を始めました。保育園に通っていた息子は、そのショベルカーをじっと見て窓から動こうとしません。かなり時間が経ってから、「今から楽しいところへ行くよ。ミッキーもいるよ。」と部屋から連れ出そうとしましたが、駄目でした。そのときの息子にとっては、有名なテーマパークより目の前のショベルカーの方が良かったのです。結局、大泣きする息子を無理やり連れて部屋を出ました。

皆さんが周知されているように、新しい教育課程で「主体的・対話的で深い学び」を推進するのは重要なことですが、愛知教育大学教授の加納誠司先生によれば、生活科が果たす大きな役割は「つながり」だということです。一つは、幼児期教育と小学校低学年での学びのつながり、いわゆるスタートカリキュラムです。これは、「タテ」のつながりです。幼児期にどんな学びを経て何が育ってきているのかを見極め、そこで育った資質・能力を小学校教育が上積みしていくような接続・発展です。スタートカリキュラムは、保育内容と密接なつながりをもつ生活科が中心的な役割を担いますが、それを他の教科へと広げていくことも大切です。これが、「ヨコ」のつながりです。４月当初は、国語や算数、その他の教科でも遊びの理念を含んだ活動重視の学びを積極的に取り入れることが必要になってきます。

もう一つは、生活科の学びを３年生以降へつなげる「タテ」のつながりです。生活科で自然の不思議さや面白さを実感することが、科学的な見方・考え方を養う理科につながります。つながりをより意識するためには、生活科主任を低学年の担任とするのではなく、中学年・高学年の担任が生活科主任を務め、生活科での学びを中・高学年へ系統的・発展的に接続していくことにも大きな意味があると考えます。

さて、「主体的・対話的で深い学び」を進めるために、生活科では特に主体的な学びを大切にしたいと思います。「秋だからドングリ」、学校の近くに池があるから「ザリガニを育てる」というように、昨年と同じことをするのではなく、目に前の子どもたちに合う自然や地域を新しい題材として単元を組み立てることが大切なのではないでしょうか。「教師が教えたいこと＝子どもが学びたいこと」が最上だと考えます。ショベルカーが見たかった子どもを、テーマパークに連れて行くような生活科の授業は主体的な学びではないと思います。「つながりと主体性」を意識した授業を、ぜひお願いします。